

第七回 景連奸計信時を賣る
孝吉節義義美に辞す

牧倉木曾介氏元が使者、壺崎十郎輝武、東條よりはせ参りて、麻呂信時が首級を進らせたりければ、義美は大床子のほりに出て、件の使者をちかく召せ、合戦の為体を、みづから問せ給ひしかば、壺崎十郎まうすやう、「兵糧乏しくまします事、氏元豫てこゝろにかゝれば、百姓們を催促して、運送せばやと思ふ程に、安西景連、麻呂信時、はや定包にわたらはれて、海陸の通路を塞ぎ、小荷駄を取らんとわれを俟。綽の難義に及びしかば、氏元ますく憂悶て、いたづらに日を過したり。しかるに景連、一夕竊に、家諫某甲をもて、氏元にはするやう、山下定包は、逆賊也。よしや蘇秦張儀をもて、百遍千遍相譚とも、美引べうは思はざりしに、信時にそゝのかされて、渠が為に途を塞ぎ、良將勇士を苦めしは、われながら浅猿、と後悔臍を噬ものから、信時口管鐵を磨て、説ども思ひかへさねば、是も亦靴を隔て、癬を搔くに異ならず。情事の情を量るに、信時は匹夫の勇士、利の為に義を忘れて、貪れども飽ことなし。景連舊好を思ふ故に、一旦合體するといへども、もし悞を改すは、狂人を追ふ不狂人、走るは共にひとしかるべし。所詮合體の念ひを翻し、まづ信時を撃果して、兵糧運送の路を開き、里見殿に力を戮して、賊首定包を討滅し、大義を舒んと思ふのみ。曩にはたまく來臨せられし、里見ぬしを要とゞめず。あるじ態の礼儀なかりしは、彼信時が拒るゆゑなり。願ふは和親城を出て、短兵急に攻かくれ。信時は野猪武者也。敵を見て思慮もなく、一陣に進んず。そのとき景連後陣より、さし挾てこれを撃ば、信時を手取にせん事、掌を返す如けん。狐疑して大事を悞給ふな。をさく回答を俟といへり。しかれども氏元は、敵の謀にもや、と思ひしかば、佻々しく従はず。使者の往返度かさなりて、偽ならず聞えにければ、さは信時を撃んとて、安西に謀じ合せ、降み降すみ五月雨の、黒白もわかぬ暗夜に、二百餘騎を引率し、枚を銜み、鑢を鉗め、麻呂信時が屯せる、瀆荻の柵の前後より、犇々と推よせて、鬨を咄とつくり掛、無二無三に突てる。敵よすべしとはおもひかけなき、麻呂の一陣劇騒ぎて、繫る馬に鞭を賞、弦なき弓に箭をとり添、素立たる癖なれば、只活路を求るのみ、防戦んとするものなし。そのとき信時声を激し、憑しげなきもの共かな。敵は正しく小勢也。推包で撃たらずや。落されて前原なる、安西に笑れな。撃よ進め、と烈しく令して、真先に馬乗出し、鎗りうくとうち揮て、逼入る奇手を突倒す。その勢ひは正に是、群る羊の中に入る、猛虎の暴るゝに異

ならず。士卒はこれに勵まれ、將後陣なる安西が、援來なんと思ひけん、逃んとしたる踵を旋らし、嗚叫て戦へば、ころろならずも躬方の先陣、外面へ追かへされ、路のぬかりに足も得たらず、迂り跌宕引かねたり。

當下秋倉氏は、眼を睜し、声をふり立、一旦破りし二二の柵を、追かへさるゝことやはある。名を惜み、恥をしるものは、われに続け、といひあへず、白旛探て腰に挿、鎧を鳴らし、馬を進めて、烏夜に晃く長刀を、水車の如く揮廻して、信時に撃て懸れば、箭の火光に信と見て、汝は氏元歟、よき敵也。其処な退ぞ、と呼びかけて、鎧を捻て礮と突ば、發石と受てはねかへし、引ばつけ入り、すゝめば開き、一上二下と手を盡す。大將かくのごとくなれば、躬方も敵も遊兵なく、相助るに暇なければ、氏元と信時は、人を雜す戦ふ程に、信時焦燥て突出す、鎧の尖頭を氏元は、左手へ丁と拂除、おつと喝て、向上る所を、長刀の柄を拿延て、内兜へ突入れて、むかふさまに衝落せば、さしもの信時爰所の痛手に、得堪ず鎧を手にもちながら、馬より挫と滾落る、音に臣等は見かへりて、飛がごとくに走よせて、その頸取て候」と言葉せわしく聞えあぐれば、義実つくくとうち聞て、「氏元がその夜の軍功、賞するに堪たれども、計畧足ざりけり。景連猛に心裏反りて、信時を撃する事、その故なくはあるべからず。夫両雄は並立す、信時景連相與にわれを撃とも早に捷すは必変を生ずべし。然るを氏元ゆくりなく、安西にそゝのかされて、信時を撃とりしは、躬方の為に利はなくて、景連が為になりなん。彼安西は何とかしつる」と問せ給へば、蛸崎十郎、「さん候。景連は、その夜さり躬方の為に、征箭一條も射出さず、いつの程にか前原なる、柵を返きて候」と答まうせば、義実は、扇をもつて膝を鼓、「しかれば既に景連が、奸計は著れたり。わが滝田を攻しとき、勝敗測かたしといへども、定包は天神地祇も憎せ給ひて、人のゆるさめ逆賊なり。一旦その利あるに似たるも、始終全からじとは、景連は思ひけん。定包竟に滅亡し、義実その地を有に及びて、信時は安西が翼になるべきものならず。只大はやりにも勇めるのみ。與に無謀の軍をせば、脆く眞なんことをおそれて、陽には義実と合體して、氏元に信時を撃せ、景連はその虚に乗じて、平館を攻落し、朝夷郡を合せ領して、牛角の勢ひを張らんとす。鼓し扇は外るゝとも、わが推量は違はじ」とその脾肝を指すごとく、いと精細に宣ふ折、氏元が再度の注進、某をそこはせ参りつ。「信時既に撃れしかば、残兵類に紊れ騒きて、逃るを直と追捨て、氏元は軍兵を、纏めて馳て東條へ、帰陣して候ひしに、宣おもはんや景連は、はや前原を退きて、平館の城を乗取り、麻呂が采地朝夷一郡、みなおのが物とせり。狗骨をりて、鷹に捉せし、氏元は勞して功なし。おん勢をさし向給はゞ、先鋒を奉りて、朝夷一郡いへばさらなり、景連が根城を

屠りて、この憤を散すべし。このよしまつし給へ」とて、孝吉貞行等に書簡を寄せたり。金碗も堀内も、こゝに至りてその君の、聰察勸智に感伏し、「はやく景運を討給へ」と頻りに勧め奉れは、義実頭をつち掉て、「否安西は討べからず。われ定包を滅せしは、ひとり栄利を思ふにあらず。民の塗炭を救ん為也。さは衆人のちからによりて、長狹平郡の主となる、こよなき己が幸ならずや。景運梟雄たりといふ共、定包が類にあらず。その底意はとまれかくまれ、志をわれに寄せ、木曾介氏元が、信時を撃に及びて、渠いちはやく平館なる、城を拔しを娼しとて、軍を起し、地を争ひ、壘觸の境に迷ひて、人を殺し民を損ふ、そはわがせざる所也。景運奸計行れて、平館を取るといへども、なほ曠らで攻来るならば、一時に雌雄を決すべし。さもなくは境を成りて、こゝより手出しすべからず。兪この旨をいへる得ず」と叮嚀に諭し給へば、孝吉貞行は、さうにもいはず、左右に侍る近習輩、蛭崎等もる共に、感佩せざるものもなく、「いにしへの聖賢も、此うへやあるべき」と只顧稱賛したりける。

かくて義実は、手づから氏元に書を給はりて、渠を賞、渠を諭して、安西を討ことを禁め、「人の物を取らんとて、わが手許を忘るゝな。鄙語にいふ、飽ことしらぬ、鷹は爪の裂るか。籠城の外、他事あるべからず」と警て、蛭崎十郎等を選し給ひし。

とかくする程に、夏寒かりし、卯花降晴わたり、風まちわぶる六月の、土用なかばになりけり。この時安西景運は、無戸訥平といふ老黨に、西三種の土産を齎し、瀧田の城へ遣して、定包頼に滅亡して、義実こゝに基を開る、祝を述、好を通じ、「曩に鳳眉を接せしより、景慕のおもひ遂に得絶す、只羞らくは信時に、席を犯されて意外の不礼、さこそは晋の文公が、書を過りし憾に似つらぬ。しかれどもその事なくは、誰か君を激して、この大業を興すに至らん。實を推は初より、大かたならず君を思ふ、景運が寸志にて、假に強顔もてなしたり。かゝる故に愚意を告て、君が為に信時を、除にければ、陽報あり。不思議に附驥の功なりて、平館の城を獲たり。一國四郡を二ツにわかちて、犯すことなく扶翼て、兒孫のすゑまで傳へなば、樂しかるべき事ならずや。些少の野品、その義に足らねぐ、乘馬三疋、白布百反、酒これを進むる。只いつまでも交の、変ひてと祈るのみ。收給は、幸ならん」と慇懃にいはせしかば、堀内貞行とり次て、「使者の口状云云」と、義実に告まつせば、義実疑ふ氣色なく、馳て貞行孝吉して、無戸訥平を響應させ、「われその使者に對面せん。等閑ならず款待せよ」と叮嚀に仰れば、貞行孝吉歡ばす、「君が賢き御こゝろもて、などで彼老狸に、欺れ給ひぬる。景運實に善に與し、徳を慕ふものならば、當國にはなき鯉を求めて、殺さんとはい計ざるべし。今さらば虚々しき、講を述、好を通じ、些の物を贈りし

は、その身に牆かまをするもの也。なほその奸計かんけいしるべからず。使者ししやを款待くわんたい給ふことは。御對面ごたいめんは物体ぶたいなし」と竊ひそかに諷ふせまつせしかば、義美よしみ莞尔わんじとつち笑わらて、「景連かげつらは実情じつじやうもて、こゝに好よを通つうせすとも、今聞いまきとこる。見るところは、憎にくむべきものにあらず。しかるにわれしうねくも、その舊惡きうあくを咎とがつゝ、交まじを結むすばすは、これ只彼ただかれに背そむくなり。かくの如ごとくにして争あらはゞ、人みなわれを不義ふぎとせん。不義ふぎにして捷がことありとも、義美よしみは願ねがひからず、努々ゆめづ疑うたがふべからず」とかへすも説論とくろんして、みづから使者ししやに對面たいめんし、訥平ねつへいが還かへるに及びて、共に金碗かなわん八郎はちらうを、安房郡あはらぐんへ遣はなして、圭壁けいへきの礼らいに答こたへ、形かたちの如ごとく贈あづかりして、「いよゝます〜」交まじを、破やぶらじと誓ちかし給たまへは、景連かげつら大おほきに歡よろこびて、孝吉たかよしをおもく款待くわんたいし、手てづから誓書ちかひがみを写うつめて、義美よしみにおくりけり。

是これよりして安西あんさいは、安房朝美あはらあそみのの二郡にぐんを領りやうし、義美よしみは神餘かむらゆの舊領きやうりやう、長狹平郡ながたへんぐんの二郡にぐんを領りやうして、犯おかすことなく、争あらふことなく、世よは長閑ながひらやかになりしかば、牧倉木曾介まきくらむねすけ氏元ぢげんは、東條とうじやうより召めかへされ、はじめて安堵あんどの思おもひをなし、君臣くんしん上下じやうげ笑わらかた向まて、樂たのしからずといふものな。

かゝりし程ほどに七月しちがつの、星ほしまつる夜よになりなければ、その夕ゆふぐれに義美よしみは、端はなちかう出いでて、牧倉氏元まきくらぢげん、堀内貞行ほりうちさだゆき、金碗孝吉等かなわんたかよしらら、功臣こうしんのみを召め聚あて、点茶てんちやの礼らい緯いをはり、むかし里見の家例には、点茶の礼といふことあり。この事、房総志料にいへり來きたかたを諱ひひつゝ、かたらせて聞き給たまひつゝ、この功臣こうしん等に宣のたまふやう、「予よが幸まことに二郡にぐんを獲えてより、波風なみかぜたゞずなるものから、とにかくに事こと繁さかくて、祈いのりし神かみに責せさす。又功臣こうしん等に賞あづかり行なはすべ、こゝにも介山かいざんを造つくるに似にたり。さても氏元ぢげん貞行さだゆきは、先考せんこうの遺命いめいを受うて、わが艱難かんなんに従したがひたる、その忠信ちゆうしんは今いまさびに、いふべうもあらざめれど、白菅河しらかんがの上うへにて、金碗孝吉かなわんたかよしに遭あざりせば、いかにして功業こうごうを、この地に建たるよしあらん。又鶴またこいづねが書かきを傳つたへずは、定包さだたかいかでか首かぶをおくらん、彼かれとこれとはわが為ために、第一だいいちの勲績いしん也。さびずははじめ、安西あんさい等らが、奸計かんけいにあてられて、軍法ぐんぽうをもて斬きれん、坎か、兵糧へいりやう竭つきて餓うつかれ、敵たかの為ために擡たげたらんか、この二ふたッに過あへからず。時ときやうやく清涼せいりやうにて、根なし言ことの葉露はつゆむすぶ、詩うたを賦あづし、歌うたを詠よむ為ために、今宵こよひは二星にせうのあふとかいへり。星ほしに君臣くんしん上下じやうげの差さあり。人の吉凶きしゆこれに係かる。われ既に天あまに誓ちかへり。當城たうじやうの八隅はつぐみには、八幡宮はつぱんぐうを建立たして、秋毎あきごとに祀まつり、又領内りやうないに徇したがらして、鳩はとを殺ころすことを禁いめん。又金碗八郎孝吉かなわんはちらうたかよしには、長狹半郡ながたへんぐんを裂ひいて、東條とうじやうの城主ちやうしゆとせん。氏元ぢげん貞行さだゆきには、所領しやうりやうおのゝ五千貫ごせんくわんを宛あ行なん。この旨こゝろこゝろ得え候まへ」と正首ただちやうに説示せつしして、手てづから写うつめかせ給たまひし、一通いつぱうの感状かんじやうを、まつ孝吉たかよしに賜たまれば、孝吉たかよし三たび戴たいきて、その返かへ返し奉まり、席せきを避さてまうすやう、「相傳あひた補佐ほその老臣らうしんに、先まだし給たまはする、恩賞おんじやう再度ふたたびに及およばせ給たまふを、推辞おしな奉まるよし候まはねど、某それは初はより、名利なみのふたつにこゝろなし。故主こしゆの為ために逆臣さかぢを、誅つひせんと思おもへるのみ。寔まことに君きみが威福ゐふくによりて、宿志しゆくしを果はたし候ま事こと、このうへの恩惠おんゑいなし」と

いへば義実うちほん笑、名聞栄利にかゝつらはず、功成て身退く。現義士の志、如此あるべき事ながら、唐山の張良は、故主の為に秦楚を滅し、後竟に封爵を、漢より受て留侯に、封せられたる例あり。われは高祖の徳なけれども、和殿はをさく、張良が孤忠に似たり。されば又、功ある人を賞せずは、誰かその志を、忠孝節義に激すべき。枉て予が意に従ひてよ」と諭し給へば氏元も、貞行も亦これを勸めて、彼

【挿絵】「一子を遺して孝吉大義に死す」「牧倉氏元」「金まり八郎」「里見よしさね」「百姓一作」「上総の大介」「玉つさ怨灵」

感状をうちも措す、遞与せば金碗八郎は、已ことを得ず手に受て、うち開き読くだち、「これ賜らじ」と辞しまつせば、只管に我意を立て、恩義をしらざるものに似たり。さりとして受ては今や故主へ對して不忠なり。受て受ざる孝吉が、「この世あの世の君が為に、せんすべあり」といひあらず、刀を昇りと引拔て、彼感状を巻そえつゝ、肚へくさと突立れば、是はとばかり、主従三人ほとり近く居よりつゝ、義実はその臂を、やをら揚て瘡口を、とさまかうさまうち熟視、「尖刀ぶかく入りたれば、助るべき瘻にあらず。さりながら、この仮にして緯絶なば誰か狂死といはざるべき。苦痛を忍びて思ふよし、心くまなくいひ遣してよ」と言ふ声を聞とりてや、信と向上て息を吹き、「故主の枉死を聞しとき、この肚ははや切るべかりした、只定包を撃んず、と思ふばかりに存命ても、身ひとつにては事を得遂す。かくは時あり縁ありて、君に値遇し奉、犬馬の勞を竭せしより、功に過たる恩賞を、今更に受候ては、後なくなりし故主の枉死を、わが幸とするに似て、存命かたきひとつなり。加以落羽岡にて、定包ならんと思ひてや、國主を傷ひ奉りし、本木村平無垢三等は、原某が家僕也。彼等が武藝は某が、劍法を傳へしかば、しらぬ事とはいひながら、下司の兵法大疵の、基を開きし孝吉が、悞に似て愉からず。存命かたき一ツ也。彼漢朝の張良がころはしらず候へ共、おなじくは田横が、死しての後も潔き、志こそ慕しけれ。君臣たま〜遊興の、席を汚す非礼の罪は、ゆるさせ給へ」と小膝を突、刃をやがて右手のかたへ、引續さんとする程に、「彼禁めよ」と義実は、焦燥給へば、貞行氏元、拳に携て、「御説也。とてもかくても眞士の旅宿、今やせむいそぐ事かは」と辭を竭せば、義実は、数回嘆息し、「われ孝吉が志を、しむるにあらねども、斯なるべしとまでは思はず。怒に恩賞の、沙汰してその死を促せし、わが生涯の悞也。やをれ八郎黄泉へかへる汝が首途に、義実、餓別せん。木曾介、彼翁を、とく〜召」と仰れば、氏元は阿と應つゝ、縁頼に立出て、「上総の一作、はやまぬれ」と声高やかに呼立れば、「兼りつ」といふ声も、鼻につまりて、目は涙、六十あまりの莊客が、前より其処に

あら袴の、脚半甲掛袴はし折て、右手に菅笠、左手には、五才ばかりの男児の、手を掖、腰を屈めつゝ、樹立間なき後園の、折戸の蔭を立出れば、「こゝへ」と氏元が、招くまに、縁類に、手をかけて伸あがり、「やよ八郎どの、孝吉ぬし。上総より参りたり。一作で候ぞ。女兒濃秋に産せ給ひし、その子はこれで候ぞ。やうやく尋來つる日、肚切給ふは何事ぞ。物いふことはならずや」と恨も泣もはゞかりの、関ならなくに貴人の、席とて影護なる。孝吉は一作と名告るを聞て目をひらき、うち見たるのみ物いはず。

當下枚杉倉氏元は、孝吉に「うち對ひ、八郎彼を見給へりや。某館へ参る折、件の老人、路次に在立、金碗氏の第は何処」とわが従者に問しかば、有繫にこれを聞捨かたくて、その來歴を尋れば、箇様々々と稚児の事さへ告るに「うちも措れず、孝吉はけふ宿所にあらず、あはんとならばわが後に、跟てまゐれ、とそが俣に、君所へこれを伴ひて、且緯の趣を、藏人に告しらせ、殿へも申上しかば、そは興あることになん。八郎がかくし子ならば、未憑じきものとおぼし、われみづから引あはさんず。その程までは金碗に、しられな」と宣ひき。これによりて一作は、稚児もろとも後園なる、諸折戸の蔭に潜せ、殿の仰を待たりしに、豈おもはんや、その事を、まだいはなくに和殿は自殺、外ながら見る老人の、心のうちはいかならん。せめて今般に親と子の、名告をさせん、と思召、これ將殿の賜也。喃八郎」と呼活れば、孝吉はやゝ頭を擡、「この期に及びて、親子の名告、それも詮なき事になん。某主君を諫かねて、瀧田を立去り候折、上総國天羽郡、関村なる莊客に、一作といふものは、則件の老人也。父が時には使れたる、私卒で候へば、某且く彼翁が、宿所に足を駐めたる、旅宿の中に渠が女兒、濃秋が許にわけ濡れて、結ぶは夢か、露の間を、千とせの秋と契りつゝ、枕の数もかさなれば、平ならぬ身となりけり、と婦が告るに「驚き、現色情は意外の悪事」と世話にもいふはわがうへなり。往方定めぬ旅の空、こゝ久恋の家ならねば、締も果ぬ妹と伏の、浮名を立て誠める、人の女兒に瑕疵ては、今さら親が許すとも、絶て合する面はなし、浅ましき所行してけり。と百遍悔、千遍悔ども、後悔其処に立ざれば、しのび〜に濃秋には、墮胎せよと勧るのみ。別に思念はなまよみの、甲斐なき急狀一通を一作に遣いつゝ、さて関村を走り去り、彼此に流浪で、五年といふこの夏この日、故主の枉死を傳聞て、定包を撃んとて、竊に還る舊里の、途の便者にあなれども、一作許音つれず。濃秋が事はいかにぞ、と毫にも問はで過したり。しかるにその子は恙なく、産せて年来養育の、誠を見ればいとゞなほ、面目なくこそ候へ」といふ声もはや片息なる。現理りと一作は、慰かねて鼻うちかみ、「有繫に悍き武夫も、恋には脆き人情、況ておん身は妻もなく、子もなき旅宿の徒然を、慰まうせし女兒濃秋

は、淫奔に似て淫奔ならず。いへばさう也氏素姓。おのが故主の胤を宿せし、彼奴は天晴果報も
の、住持がね、とこころでは、婆々もろ共ら歡ひつ。しれどもしらぬおももちを、何とか猜し給ひ
けん、和君は出てかへり給はず。往方を索わびつゝも、女兒は程なく臨月に、産おとせしは男児
也。あな愛たし、と祝く間なく、濃萩は積る物思ひに、肥立て竟に十萬億土、遊てかへらぬ人とな
る。その初七日を二十夜、寔に巨面を爬み米、手の内出しつ、乳を貰ひつ、生死ふたつに三界流轉
患苦は詛たる言の葉に、演説さるゝことならず。さはれ赤子は健也。主と女兒が形見ぞ、と見れ
ば可愛く、いと惜く、晝は終日懷に、夜は通宵爺々婆々が、迭代に添臥て、やうやく立ば、跣
よといそがし、笑へば、物をとくいへ、とこころはかりは引伸す、綿線馬に索手綱、孫に牽れて
二番草、とり後れたる瘦田の桑山子、おなじことして日を送り、年をかさねて四といふ、去歳の
秋より婆々が病著、片手所為なる看病は、屈ぬ棚の薬鍋、嚙兒に絆入て熬著までに、煎じ詰たるそ
の年の、大晦日には婆々が往生。片腕もがれし木偶と、稚児とわれ只三人、棺を守てあら玉の、年
を迎る門松は、冥土の旅の一里塚、禅僧兒に悟て見ても、晝かたきは凡夫心。六十八の今茲こそ
一生涯の憂苦患難、ひとつに聚てもまだ足らぬ、再三たびの大厄難、孫にも愧す泣老が身は、春
の外山に笑れても、涙の垂氷凍解て、佛へ手折る背門の梅、春も恰好五ツ子が、無心で真似る念仏
に、欠伸の雜る宵迷ひ。短夜なれや着過て、卯月の下流より上総のうらまで、隣國の事、和君が事、
合戦のやう隠れなし。われ一たびは驚きしが、是より心に勇あり。いゆきて訪ん、と思ひしかどど
歩行不便の老人が、稚兒肩て戰場にゆかんはいと危し。時を俟ん、と思ひかへして、討おさめた
るよしを、聞ぞ定てけふこゝへ、来る甲斐なけれ令般の對面。過世の業報想像る、一作が悲みは、
物の屑にも候はず。この子が人と成る後に二親ながら兒しらぬ、遺憾はいかならん。喃加多三、あ
れこそおん身が參々なれ。顔見おほえよ」と指せば、稚兒は伸あがり、「參さま喃」と声立て、呼
るゝ親は見るばかり。物いひたげに動せし、肩の色変りつゝ、はや臨終と見えしかば、義実はず
を、ほとりちかく召よして、と見かう見つゝ、「面影は、父八郎によく肖たり。その名は何と呼ぶ
ぞ」と問せ給へば、一作は、膝推屈てうち向上、「楚と定し名は候はず。故主と女兒が形見なれ
ば、加多三々々と喚せり」と申上れば、「さぞあらん。この子を我に得させかし。父孝吉は予
を輔し、大なる功あり。これをその子の名に著して、金碗大輔孝徳」と名告て父が忠義を羨嗣げ。
人と成なは形のごとく、長狭半郡を裂與て、東條の城主とせん。一作は外戚也。もろ共に留りて、
大輔が後見せよ。當坐の勸賞五百貫、この稚兒に取するかし。これを冥土の苞苴にして、佛果を
得よや八郎」と呼び激されて孝吉は、鮮血に塗るゝ左手を抗、主君を拜み奉り、きりゝゝと引違

す、刃の蹟に大腸の、出るをやがて爬そえ、「人々介錯たのむぞ」といふを末期の一句にて、項を伸せど勝かねし、苦痛させじ、と義美は、おん佩刀を引抜て、みづから背に立給へば、哀果敢なし八郎が、首は前におちてけり。賞期はしても堪かねし、一作は声を惜す、泣つゝ老の諍言を、うけつ答つ、氏元貞行、いと正首に慰れば、禪児は只おろくくと、酸鼻のみ情由しらず、綻断たりし親の顔を、さし覗くも亦哀れ也。

されば金碗八郎が死果るとき星墮て、七日の月は西に入り、陰々として心火閃き、女子の像、影のごとく、大輔が身にそふて、かき消す如くなりけり。これを見るもの義美のみ、その餘はすべてしらざりき。かくて義美は、氏元貞行を近く召よせ、孝吉が送葬、大輔を養育の、事叮嚀に命じ給ひつ、聽て後堂にぞ入り給ひぬ。時に漏刻高く音して、夜ははや亥中になりけり。

作者云。この段七月の初旬なれども、出像は冬の衣裳に似たり。現羅衣は画くととも、彩なくては定かならぬもの也。これらは画者の好にまかして、敢時節に拘らず。かゝる事問尋かり。閱者ふかく答給ふな。

又いふ。この出像には、氏元をのみ出して、貞行を省きつ。大かたならぬものどもなれども、この中にはさせる事なければ、割腕氏を助けし也。

又いふ、巻端第一回、結城合戦の條より、このに至て僅に四ヶ月、嘉吉元年四月に起りて、おなじ年の七月に終る。儂れはその間、八十餘日のことになん。第八回に至ては、年月遙に程經りて、十六七年の事に及べり。その間には伏姫の、成長ををさくいふのみ。させる物語なき処は、皆省略て、くたくしくいはず。これらも例の事ながら、精麿互に趣を異にすなれば、柱に膠するに似たれど、次序を悞こともやとて、よくも見ざらん人の為に、かゝるよしをへみづから注しつ。